

佐藤健二著

『社会調査史のリテラシー』

——方法を読む社会学的想像力』

評者：江頭 説子

■ 本書の特徴

本書は書下ろしではなく、論文集である。著者が18年前から書き始めた社会調査の「方法」に焦点をあてた日本近代の歴史社会学的な分析による調査史、方法史を1冊にまとめた大著である。著者の論文は、社会調査を質的・量的に代表される二分法ではなく、社会調査それ自体が社会という空間においてもつ力をどうとらえるかという視点がつらぬかれている。そして本書で主題となっているのは、認識の生産手段あるいは生産様式という意味での「方法」である。

20編で構成される本書の流れは大きく捉えて4つにわけられる。第一に、日本における都市社会学の形成を論じつつ、戦後社会学方法論をいまなお縛っている、いくつかの強固な二分法を主題化した論文群である（1章～6章、15～17章）。第二に、「調査」行為それ自体を、コミュニケーション現象としてとらえる視点などの論文群（7～9章）である。第三に、「調査のなかの権力」にいたる問題を中心に、「国勢調査」や地域社会調査の歴史の発掘につながっていく論文群である（10～14章、18章）。第三の論文群で著者は、社会調査のもつ技術としての力の利用は、社会に対する認識の生産に

寄与するが、その力の無自覚な利用は、他者支配・社会管理の権力ともなりうることを指摘する。しかし、その技術はまた、生活する人間たちの知ることによる抵抗を根拠づけ、よりよい生を追求するための知識生産にも役立つことから、調査することを支えている知識や技術や能力を、「リテラシー」としてとらえた論文が4つめの論文群として編纂されている（19、20章）。各章のタイトルは以下のとおりである。

■ 本書の概要

- 1 日本近代における都市社会学の形成
- 2 モノグラフィの都市認識
- 3 東京市社会局調査を発掘する
- 4 コミュニティ調査の方法的課題
- 5 ライフヒストリー研究の位相
- 6 量的方法と質的方法が対立する地平
- 7 コミュニケーションとしての調査
- 8 内容分析とメディア形式の分析
- 9 調査史のなかの『都市の日本人』
- 10 調査のなかの権力を考える
- 11 厚みのある記述をつくる
- 12 国勢調査「美談逸話」考
- 13 社会調査データベースと書誌学的想像力
- 14 テクノロジーと記録の社会性
- 15 図を考える／図で考える
- 16 『社会調査ハンドブック』の方法史的解読
- 17 「質的データ」論 再考
- 18 社会調査のイデオロギーとテクノロジー
- 19 地域社会に対するリテラシー
- 20 都市を解読する力の構築

本稿では、各章の紹介をするのではなく、「方法論」、「社会調査史」、「リテラシー」という概念に焦点をあて、概要を説明していく。

まず、方法論について、著者は認識結果の正

当性を先取りして保証するためではなく、まさに学問のプロセスを意識化し共有するためにこそ論じられなければならないという(366頁, 以下, 引用については頁数のみ表記する)。著者は社会学史研究が、「方法」ではなく「理論」の側に置かれた経緯についてあきらかにしたうえで、理論と調査という二項対立ではなく、「社会学史」という歴史認識を、社会学的実践の全体において成立させる必要性を説く。調査史とりわけ方法史の明確化は、学説史としての学史をより一般的な社会認識の生産の歴史の方へ拡張していく触媒となる。すなわち調査という実践を社会という空間の中で行なう「主体」とその「実践」の具体的形態に焦点をあてること、それ自体が社会学の態度を要請し、さらに主体の動機や思念された意味だけでなく、調査という関係的实践を支える「場」と「テクノロジー」の歴史へと、観察領域を拡張していく。そこに「社会」と名づけてきた対象についての、認識の生産技術と生産力が問われるという(463-464)。

つぎに、社会調査史については、いかにデータから社会を認識できるか、さらには他者が表象するものをどのように理解できるかという、社会学という学問の実践の原点にすえられるべき問いは変わらず、社会調査史とは、そうした根源性のレベルで描かれるべき、方法論的基礎づけの歴史的展開であるとする(466)。本書のタイトルが、「社会調査の」ではなく「社会調査史の」である理由は、社会学という学問の想像力が、見落とされた「社会性」と忘れられた「歴史性」の厚みのなかから立ち上がるものだからであり、著者にとって「社会調査史」はもうひとつの「社会学史」であるという考えに基づいている(3)。そして、著者が「方法史」に着目し目指す社会学史とは、調査史・実践史としての社会学史である。そのため、学説のパ

ラダイムの変遷を追うのではなく、調査実践のプラティークの変容を主題化し、対象についての認識を生産する過程、すなわち観察や分析が行われているプロセスに光をあてていく(499)。社会調査の技法は、複数性および多面性を帯びており、それぞれに異なる起源をもち、異なる経緯をたどってきた。そして、その方法の効果それ自体が社会的に構築されたものとして解釈されるべき対象であると主張する(370)。本書では、「東京市社会局調査」(2章)、「月島調査」(14章)、『口述の生活史』(中野 1977) (5章)、『都市の日本人』(R. P. Dore 1962 [1958]) (9章, 13章)、『社会調査ハンドブック』(安田 1958, 1960, 1969, 1982) (16章)等を事例に、読み解かれるプロセスが提示される。

本書は、ほぼ論文を公表した時系列にしたがって編纂されている。14章のあたり(2000年代に入った頃)から、筆者は読み解くことの重要性について「リテラシー」という概念を用い、明確に主張するようになる。著者は、本書とは異なる著書『社会調査論』(2009)において、「『書く』ことは、実は『書きなおす』ことである」と述べている(佐藤 2009:98)。この端的な言葉を、読み解くことにあてはめるならば、「『読む』ことは、実は『読みなおす』ことである」と言えるだろう。

著者は、「徹底して読む」という基本姿勢が重要であり、社会調査史という経験の集積に学ぶ用意は、自分の方法の確立や再検討に役立つという(492)。ここでいう「読む」ことを社会調査の実践とむすびつけるには、「テキスト」の概念を文字による紙のうえの表現という狭い記号的な意味から、社会という空間に刻みこまれた表象の全域に広げるメディア論的な拡張が必要になる(492)。そこで19章では、地域社会に対するリテラシーについて、調査をコミュ

ニケーション現象ととらえなおす立場にたち、今日の地域社会調査論に要請されているものについて考えていく。

著者は、都市社会調査と農村社会調査に焦点をあて社会調査史を鳥瞰し（表2 502-509）、3つの視点から読みかえていく。第一に、社会学の位置、社会調査の起源について、生活主体の領域から読みかえることを試みる。別の言い方をすると、社会学が目指すところの観察や調査という実践は、いかなる社会認識の戦略のなかに、方法として位置づけられるかという点である（510-512）。第二に、統計データを生み出す制度と主体についてである。つまり、統計もまた制度に支えられ組織化された主体によってつくられた社会の記述、すなわち社会のテキスト化であったという事実である（512-514）。第三に、データやテキストの読みかえの意義についてである。ここでは「二次データ」、「二次分析」についての問題がとりあげられる。読みかえることにより、これらのテキストを配置しなおし、社会の認識に利用しようとする実践において問われるのは、それが制度システムからの統治の再生産のための知識にとどまるのか、生活主体からの社会運営の変革のための知識を生産するのかにあると説く（515-518）。

本書の面白さは、社会調査の成果や社会調査に関するテキストブックを、「結果」としてとらえるのではなく、研究対象の「テキスト」として捉え、読み直している点にある。調査を設計する際には、先行研究のサーベイを必ず行なうが、その時の視点は、得られた知見、成果をおさえるという読み方を評者はしてきた。しかし、評者は調査結果を読み直すことの意味について考え始めていた。そのきっかけは、ライフヒストリーの金字塔的作品である『口述の生活史』（中野 1977）をテキストとした一連の研究を読んだことにある。具体的には、本書に採

録されている「ライフヒストリー研究の位相」（佐藤 1995 本書では5章）、「『口述の生活史』作品化のプロセス」（大出 1995）、「『問わず語り』の背後に潜むもの—『口述の生活史』成立の謎に迫る—」（武笠 2009）にある。そこで、本書が刊行されることを心待ちにしていた。

著者はあとがきで、「一冊にまとめるにあたって、つながりを考えて本文にも相当に手を入れ、図版や資料の明らかな重複は目立たないように整理したが、通読してみると、二項対立解体の『通奏低音』もさることながら、しだいに付け加わっていく、『フィグーラ』（開き手に訴える特徴的な旋律形、ある意味での決まり文句）のくり返しも多い。（中略）その反復をくどく感じる読者もいるとは思いますが、ある種の変奏曲としてお許しをいただきたい。」と述べている。しかし評者は、そのくり返しがあることにより、著者の主張がより明確に読み手に伝わってきたのではないかと感じている。何より、調査結果を読み解く重要性和面白さを感じた。

■ 今後の課題と展望

本書は、さまざまな立場、例えば都市社会学、歴史社会学、知識社会学等の領域から、また社会学史だけでなく社会調査に携わる実践者からの書評がなされるだろう。それが「社会調査」を読み解くことにつながり、社会学史としての「社会調査史」の構築を可能にする。本書評は、内容の紹介にとどまり、批判的検討を加えるまでには、評者の力不足で及ばなかった。今後の課題としたい。

リテラシーを高めるためには、比較検討も必要である。「社会調査史」の視点から社会学の展開の中で社会観察や社会調査がどのように試みられてきたのかについて再検討した研究として、川合（2004）がある。佐藤と川合の研究

とともに検討されている調査に「月島調査」がある(注)。月島調査で得られた一次データおよび報告書だけでなく、読み直された研究を比較検討していくことにより、二次分析の方法論を構築していくことも可能である。

また、筆者は労働・産業社会学を専門とすることから、特に第二次世界大戦後多く実施された労働者調査、職場調査の「方法」に着目した、読みなおしを試みたいという衝動に駆られた。本書は、このように課題を多く見出すことのできる1冊である。

【注】

月島調査の一環として、月島および月島近隣でおこなわれた家計簿調査の原簿が大原社会問題研究所に所蔵されている。そして、月島家計簿調査の一部がWEB上でも公開されている。

【引用文献】

川合隆男(2004)『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣。
 武笠俊一(2009)『「問わずかたり」の背後に潜むもの—『口述の生活史』成立の謎に迫る—』(三重大学人文論叢 第26号 17-28)。
 中野卓(1977)『口述の生活史』御茶の水書房。
 大出春江(1995)『「口述の生活史」作品化のプロセス』(中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂)。
 佐藤健二・山田一成(2009)『社会調査論』八千代出版。
 (佐藤健二著『社会調査史のリテラシー—方法を読む社会学的想像力』新曜社, 2011年1月刊, xviii+586頁, 定価5,900円+税)
 (えとう・せつこ
 法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員)

●中国型市場経済に固有の理論モデルの構築を行う
菅原陽心編著—菊判・四三頁・九四五〇円税込

中国社会主义市場経済の現在

—中国における市場経済化の進展に関する理論的実証的分析—

I 中国社会主义市場経済の理論的背景

第1章 中国社会主义市場経済の現状と方向性……………菅原陽心

第2章 「社会主义市場経済」と改革開放……………植村高久

第3章 資本主義の発展段階論と中国経済の台頭……………小幡道昭

第4章 マルクス経済学の市場経済観と現代の市場経済……………山口重克

II グローバル資本主義と中国経済

第5章 グローバル資本主義の中国経済……………清水敦

第6章 グローバル経済化の進展と中国経済の課題……………河村哲二

第7章 世界金融危機後の東アジア域内外貿易関係の変化……………加藤國彦

III 市場経済化の現在

第8章 民営企業の誕生・進化過程における企業家精神の役割……………苑志佳

——吉利汽車と李書福……………王東明

第9章 中国の都市部における大衆投資家の形成……………王東明

——個人投資家調査を中心に……………

IV 労働力市場の現在

第10章 市場化の展開と労使関係……………李捷生

第11章 中国の非正規就業の問題と特徴……………溝口由己

第12章 中国の社会制度としての都市戸籍と農村戸籍……………松尾秀雄

第13章 中国から日本への労働力流入……………竹野内真樹

●なぜ台湾経済は五〇年代から輸入代替工業化への軌道に乗れたのか
凌照宏著—A5判・二六〇頁・五八八〇円税込

近代台湾の電力産業

——植民地工業化と資本市場——

戦前期・戦時・戦後復興期を通じた台湾の電力産業と重化学工業に対する実証的な経済史分析から台湾の産業構造を明らかにする。

●19世紀半ばから百年にわたる、コレラをはじめとする伝染病への対応を描く
福士由紀著—A5判・三四〇頁・七一四〇円税込

近代上海と公衆衛生

——防疫の都市社会史——

近代的公衆衛生行政の導入と定着過程の検討から、防疫措置の実態と社会の反応を明らかにし、衛生事業を介した国家・社会・個人関係の変容の歴史的展開を解明。

●移住農村女性を支える都市の労働力再生産の構造を解析
大橋史恵著—A5判・三三〇頁・八一九〇円税込

現代中国の移住家事労働者

——農村・都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス——

農村女性の都市への移動と再生産労働再編の関係を北京市の「家政サービス」の生成と展開に着目して考察する。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
 ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>